



好日好読

森鷗外『カズイスチカ』を深読みする ～幕末蘭方医とワイマール文化

空知医師会 方波見康雄

森鷗外の『カズイスチカ』は、医療思想史の視点で読んでも味わいの深い短編です。この作品に登場するHufeland（フーヘランド）という人物をキーパーソンとして医史的深読みを試みてみました。

まず、短編の文中一節を紹介しておきます。

「翁の医学はHufelandの内科を主としたもので、もう古くなって用立たないことが多かった。

若い花房が、翁に及ぶべからざるところがあった。翁は病人を見ている間は、全幅の精神を以て見ている。父はつまらない日常の事にも全幅の精神を傾注している。

宿場の医者たるに安んじている父のresignationの態度が、有道者の面目に近いということが、おぼろげながら見えて来た。其のときから、にわか父を尊敬する念を生じた」

(新潮文庫から引用。漢字、仮名づかい一部改変)

文中の翁（父）とは、明治期東京の大千住で診療所を開業する医師のこと。花房はその息子、帝国大学で当時の最先端医学を学ぶ医学士。ときどき父の診療所で手伝いをするようになり、そこでの日常生活や診療風景などを描いたのが、この短編という設定。表題のカズイスチカはラテン語のcasuistica、臨床記録という意味があります。

この文中一節のHufelandという人物こそが、西欧医学の新知識への憧憬と探究に燃える幕末期蘭方医たちの魂を魅了したドイツ人内科医だったのである。

フーヘランドとワイマール文化

さてこのHufeland＝フーヘランド（1762～1836）は、祖父と父親がワイマール王宮の侍医を務めた、代々が医師の家系の生まれでした。しかし病弱な晩年の父親を支えて開業医となり、現在でいう地域医療に献身。ほぼ10年にわたり、昼夜を問わぬ外来診療と遠路をいとわぬ往診に専念し、詩と文学や音楽にも造詣を深め、自作の詩も遺しています。彼は、ゲーテやシラーそしてヘンデルやカントなどとも親交があり、カントとは往復書簡を取り交わし、その著作『実践理性批判』『経験論』などの影



響を受けたといえます。やがてこうした努力が花開き、ワイマール侯の推薦を受けてイェナ大学教授になり、ドイツ医学界を代表する臨床医となりました。

フーヘランドはこうして、ヨーロッパ文化史の大きな文脈の中で自らの医療実践と思想と思索を深めていき、多くの論文と著書も刊行。やがてその影響を受けることになったのが、はるかFar Eastの小さな島国日本の幕末期蘭方医たちであったのです。その流れを、少したどってみましょう。

フーヘランド最晩年の著作、1863年発行の“Enchiridion Medicum”は、ヨーロッパ各国でベストセラーとなり、オランダ語訳が蘭方医たちの手にもわたるようになりました。その日本での代表的翻訳書は緒方洪庵（1810～1863）訳『扶氏経験遺訓』（全27冊）。1857年に出版されると、たちまちにしてベストセラーになっていきます。

『カズイスチカ』の文中一節で翁が読んでいたフーヘランドの医学書とは、たぶんオランダ語訳や洪庵和訳だったのでしょう。

『医戒』と西欧文化の受容

この翻訳書の巻末に紹介された「扶氏医戒之略」十二ヵ条は、フーヘランド原書の「医師の義務」の翻訳。洪庵が創設した「適塾」の塾訓として、塾生たちに大きな思想的影響を与えました。その中には、橋本左内や小関三英や福沢諭吉などの逸材たちがいたのです。塾生ではないが高野長英もまた、その一人でした。封建社会・幕藩体制に抗した彼らの魂を揺るがしたのはたぶん、「塾訓」の底を流れていたフーヘランドの生き方、つまり西欧思想の自由な精神やリベラルアーツの気風だったのでしょう。（注釈：幕末期蘭方医たちは、Hufelandを漢字表記で〈扶歇蘭土（度）〉、ヒュヘランドと呼んでいました。「扶氏」は、その略称）

杉本つとむ早稲田大学名誉教授が、『扶氏経験遺訓』について興味深い指摘をしています。

『扶氏経験遺訓』の「経験」という言葉は、日本で考案した漢語であり、蘭学者・宇田川榛斎の著書『経験枢機内外要論』が初出の訳語だという。そして、扶氏つまりフーヘランドのいう「経験」とカントの「経験論」とは、共通の思想的流れとしてつな

がっている」と。

カント哲学は、18世紀末までの西欧思想の歩みの集大成でもあります。フーヘランドの医学書が幕末期蘭方医たちに伝えたものは、当時の最新医学知識だけではなく、古代ギリシャとローマに始まる西欧文化の伝統と歴史、ルネッサンスとバロック文化を経過した人文思想と精神そのものということになります。

なお、哲学者ヘーゲルもまたしばしばゲーテを訪ねていました。フーヘランドがあるいは若き日のヘーゲルと言葉を交わし、彼の大作『精神現象学』の片鱗に接する機会があったかもしれません。とすると、フーヘランド著の「医師の義務」にもその影響があるかも知れず、『カズイスチカ』の深読みにいっそうの興趣を添えるものとなってきます。

洪庵と同時代の蘭方医に杉田成卿という俊才がいました。オランダ語やドイツ語、ラテン語などにも習熟していたそうです。彼が、洪庵に先立ってフーヘランドの「医師の義務」を翻訳、『医戒』として出版されました（表紙・写真）。

曾祖父が杉田玄白。『解体新書』を翻訳したフロンティアの実証姿勢と志を継承して、幕末動乱の時代を生きた孫が訳した『医戒』の一部を要約引用しておきましょう。

「医其術ヲ行フニ方テ、唯病者ヲ視ルベシ。切ニ其貧富、大小ヲ顧ルコトナカレ。夫レ一握ノ黄金モコレヲ貧士双眼ノ感涙ニ比セバ何物ゾ。

假令ヒ其生ヲ救ハザルモ、コレヲ慰スルハ是レ仁ノ大ナル者ナリ。曰ク望ヲ失フコトナカレ。望ハ慮ヲ生ゼシメ、精神ニ新案新試ノ工夫ヲ起サシム。

故ニ病者正ニ死スル時ニ方テモ、医末ダ棄テ去ルベカラズ。其苦惱ヲ減ジ、安ンジテ死ニ就カムルコトヲ得ルトキハ、コレヲ徳惠ト謂ハザルベケムヤ」

『医戒』が示しているものは、実証科学の成果を大事にして現場に活かすという現代の緩和ケアの考え方や地域で医療に励む実地医家とも共通する医療思想でもあります。近代ヨーロッパの思想の受容はこのころすでに、蘭方医たちによって準備されていた、と言ってよいでしょう。

福沢諭吉と医学

福沢諭吉の『文明論之概略』や『学問のすゝめ』の下地もまた、このころに芽生えていたのでしょう。彼は後年、「贈医」と題した七言絶句を書いています。福沢諭吉が北里柴三郎に贈ったこの言葉は現在、慶應義塾大学医学部北里図書館に掲額されています。紹介しておきます。

無限輸贏天又人 医師休道自然臣
離婁明視麻姑手 手段達辺唯是真

読みは、こうなります。

「無限の輸贏（しゅうえい）天また人
医師 道（い）うを休（や）めよ
自然の臣なりと
離婁の明視と麻姑の手と
手段の達するの辺
唯だ是れ真なり」

「輸贏」には、勝ち負けや智慧くらべなどという意味があり、「離婁」は『孟子』の「優れた視力を持つ人物」に由来して、慧眼つまり物事や現象の本質を見抜く鋭い観察力という意味になります。

「麻姑の手」とは「孫の手」のこと。古代中国の『神仙伝』に、鳥のように長い爪を持つ娘が、痒いところに手がとどくような施しをしたという物語が典故だそうです。精緻な技術を磨いて良いケアをする意味があります。福沢諭吉が言いたかったのは、医師に大切なのは、診療の最新知識と医療技術の修練である、ということなのでしょう。

彼が適塾で緒方洪庵に教えられた蘭学の「実測究理」の姿勢、さらには同時代人の杉田成卿などが実践していた実証的医療の姿などが、この七言絶句の下地となっていたと推察されます。そしてこの背後には、フーヘランドに象徴される西欧思想があったと考えてよいでしょう。

福沢諭吉と森鷗外—その批判的精神

福沢諭吉が適塾で学んでいたころの塾生仲間、小関三英は「蛮社の獄」につながり、自殺。橋本左内もまた、幕藩体制を批判して処刑されています。この二人とも、医師そして蘭学者であったのです。同時代人の高野長英は、開国の世界史的必然性を洞察していた先覚者であったのです。脱獄して囚われ、非業の死を遂げました。だが彼もまた蘭方医であり、『医原枢要』や『蘭日外科辞書』などの著作ものこしているのです。

福沢諭吉はだから、七言絶句の「離婁明視」に、時代の不条理を洞察する慧眼つまり科学的人間的な批判精神を、医師は培う必要があるという切実な願いを込めていたのでしょう。不条理な専制体制の犠牲となった惜しむべき逸材たちへの、レクイエムと受けとめてよいでしょう。

『カズイスチカ』は、ヨーロッパの医療と思想そして文芸の歩みと、日本におけるその受容の歴史をふまえた長大な物語が下地になっていると思えば、読むほどに興味尽きないものがあります。

（本稿は実地医家のための会機関誌「人間の医学」第250号に掲載した拙著「深読み・森鷗外『カズイスチカ』」を大幅に加筆したものです）